

---

# 猫耳事件

朋也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫耳事件

### 【Nコード】

N8941U

### 【作者名】

朋也

### 【あらすじ】

ある日、小6の高橋 翠（主人公）は高3の兄の作った薬がたくさん入ってる倉庫を整理していたら、一つのビンを割ってしまう。そしてその薬の効果で猫耳と猫の尻尾が生えてしまう。さて主人公はどうなってしまうのか？

ネ・・・猫耳？

はあ。

疲れた。

今日は兄ちゃん（高橋 耕輝<sup>たかはし こうき</sup>）の作った薬の倉庫の整理を手伝っている。

僕「これはこっちで…（パリン）あ、割っちゃった。

「何割ったんだよ！」

「猫ミツミーって書いてあるけど・・・」

それをいった瞬間兄は外に逃げた。

そのとたん薬が倉庫の地面全体に広がった。

一気に地面がスケートリンクみたいにツルツルなって転んでしまった。

僕「う・・・イタタタ・・・」

そうして僕は頭と尾てい骨らへんから違和感を感じた。  
頭を触ってみた。

「ん？なにこれ？」

それから尾てい骨あたりから出てるものを引っ張って前に出してみた。

僕「痛っ…痛い？」

そこにあつたのは白い猫の尻尾だった。

ポケットにある折りたたみの鏡で頭を確認したら

「猫耳…？」

そうすると兄は棒読みでビンのラベルに書いてある薬の説明を読んだ兄「この薬は広がり良く部屋にいる人全員に仕掛けることができます。

体に少しでも触れると効果が表れます。

半年から１年で効果は切れますが場合によっては１０年たっても戻らないことがあります。」

僕「えええええw w w w w w w w w w」

僕は笑うしかなかった。

それと一緒に涙も出た。

兄「自業自得。」

僕「…」

そうしてドタバタな生活が始まったのであった。

## 猫に近い・・・というか猫

兄「・・・ずっと見てるとかわいく見えてくる・・・」

僕「え・・・？」

兄にはそういう趣味があったのか・・・

「しつぽ・・・」

そっいつて僕に生えたねこの尻尾を触ってきた。

僕「痛っ！」

今日初めて尻尾をつかまれた時の猫の気持がわかった。

兄「猫耳が反応してる…カワイイ」

なんだ！この兄の圧力は！すごい！すごすぎる！

・・・本気でそう思った。

そんなこと思っていたら兄が猫の本を持って聞きた。

兄「尻尾の動きと猫耳の動き…と。」

僕「これからどうしよう・・・恥ずかしいこといっぱいあるだろうし…」

兄「翼の言う言葉と動きが連携してるw」

僕「ひどいにゃ・・・え？にゃがついちゃうにゃ！」

兄「3日ごとににゃがつく日がやってくるという裏設定！」

僕はイライラした。

兄「尻尾が左右に揺れているってことはイライラしてるってことか…」

え？自分の意識と関係ないと思ったのに…さらに恥ずかしい！

僕「もう嫌みやーーーーー！！！！」

続く

猫に近い・・・というか猫（後書き）

ちよつ  
ぴりオマケ

僕「僕：自分がかわいく思えてきたみやあ？・・・」

兄「副作用としてまたび、煮干が好きになります。」

僕「エ！またたび？またたいほしいみゃー！」

兄  
w  
w  
w  
w  
w  
w  
w  
w  
w  
L

僕「……」  
(怒)

そうしていつもの生活は変わった。

僕「学校休む…というかそうしないとヤバイにや」

兄「行け。学校は体調を崩さない限り行かなきゃだめだ。」

僕「これだって病気と同じようなものじゃにやいか！」

…とまあこんな感じで10分くらい口論が続いた。  
結局行くことになってしまった。

僕「猫耳は帽子でかぶせられても校内ではとるし、尻尾は長くて隠せないし、仮に隠せたとしても痛いし、体育の時など着替える時どうすればいいんだにやあ…」

兄「頑張れ。」

僕「見つかったら大変なことになるのは見えてるみやあ…」

兄「頑張れ。」

でも今日は体育がなかった。

僕「やっぱり猫耳・・・」

心配したが今日は運が良かった。1、2時間目は自習で、後は先生が休みだったので代わりの先生で、帽子をとりなさいとは言われなかった。

5時間目は学校のクラブ活動でパソコンクラブだったので着替えなくばれることはなかった。

でも尻尾は授業中でも、いつでもムズムズくすぐりたいし、少し痛かった。

夜になって母親が帰ってきた。

兄「ちゃんと説明しといた。」

僕（怒）

母「あら、なかなかかわいいじゃないの」

僕（もつと深く考える…）

そうして夜ごはんの時間

母「はいはい猫ちゃんエサの時間ですよ」

僕（兄ちゃん変なこと絶対に母に言っただな！）

そう言っただけ母は猫缶を持ってきた。

兄は僕に視線を合わせて笑った。

僕「こんにゃの食えにゃいよ！」

母「あら、恥ずかしがっているのね。猫ちゃん？」

…ん？意外と食えるものだ。

人間が食べてもおいしいものなのか？

いや…違う今の僕は表すと半猫化しているからだ…

母「さっき急いで買ってきたのよ。感謝しなさいね。猫ちゃん。

あ、あとまたたび入れといたから。」

兄「またたび入れたの？またたび抜けるまで言葉が…」

僕「にゃあ？（どうなるの？）」

兄「まあこうなるんですよ。」

僕「にゃああ？（なんか変なこと言っただけ？）」

風呂の時間の5分前

僕「はあ…洗うところが増えた。猫耳もシャンプーか？尻尾はボディーソープかにゃ？」

母「いいえ。全身猫用洗剤。」

僕「僕はペットじゃないし猫じゃにゃ…」

母「猫体質。猫肌。でしょ、耕輝。」



兄「そう。猫になってないところも猫と同じ感じになっているから。」

母「やっぱり翼は天才ね！」

僕「許せにゃい…（怒）」

ペットみたいな扱いをされて風呂でも兄に猫用洗剤で洗われて…と  
いうか水にあたりたりかぶったりすると不快感がする…これも猫体  
質の関係か…

それよりも心配なのは体育がある明日の学校…

そうしていつもの生活は変わった。（後書き）

ちよっぴりオマケ

母「猫耳姿の翼はカワイイ！前から猫が飼いたくて・・・」

僕「あ、ちよっそこはだめえ・・・んにゃお？」

母「やっぱり猫ね！次は猫じゃらし！」

僕「にゃお！にゃお！」

母「w w w w w w」

僕「…（怒）」

夜はたいへんだけれど朝は恥ずかしい…それが半猫生活というもの？

シリシリシリ…ピコン！

目覚まし時計が鳴って僕は起きた。

兄も僕の目覚ましの音で起きた。

僕「夢…じゃなかった…」

僕は起きた時昨日の出来事を一瞬、悪夢だったらいいなと思ったがやっぱり猫耳と尻尾は生えていた。

兄「おはよ。」

僕はつぶやいた。

僕「学校…」

兄「頑張れ。」

僕「小6の男が猫耳生やして学校行ったらどうなると思う！？」

兄「可愛がられる。」

僕「それだけですか？」

言葉のキャッチボールのようにリズムよく兄とのケンカ？が始まった。

一瞬、3日ごとに「にゃ」がつく効果の日だけ休むなんて考えてしまった。

一階のリビングに降りた。

母がいた。

母「猫ちゃーん？今日もかわいいわねえ〜」（ナデナデ）

僕「だから僕は猫でもペットでもn…ああ…にゃ〜ん」

僕はもう人間として扱われてないと思った。

…というか扱うとかいう言葉の時点でおかしい。

僕「まさか猫缶じゃないよね…」

母「朝はキャットフードだから安心しなさい。」

僕（怒）

玄関に猫の餌をいれる器があつてその横にはボウルに水が入っていて、餌をいれる器にはキャットフードが入っていた。  
なんだかすごく恥ずかしかった。

母「ハイまたたびよ〜猫ちゃん？」

僕「に、やゝまたたびいー」

母（笑）

僕「にやっ にやっ！」

僕は何をしているんだろう？

気が付いたら餌を食べていた。

母「ハイいい子ちゃん？」

僕「にやゝん（なっ…なにを僕はしているんだ！）」

母「やっぱりかわいい？」

ああ…あと1時間で学校に行かなくちゃならない…

どっしり。

（泣）

夜はたいへんだけれど朝は恥ずかしい……それが半猫生活というもの？（後書き）

ちよっぴりオマケ

母「猫ちゃん？煮干よ」

僕「につ……煮干……」

(沈默)

母「食べていいのよ。」

僕「にやあ」  
(食)

母「人間だったらあり得ないこと。WWWWWWWWWWWWWW」

僕（怒）

## あやしまれる学校生活　↓登校班↓

あれこれあつて学校に出かける時間。

僕「どうしたらいいんだろ」

母「あら、言葉が戻った…orz」

僕「ガクシしなくてもいいだろ…」

母「」

僕「固まってる…」

僕「ひとまず尻尾はズボンの中に…飛び出しちゃうな…尻尾の力を抜いて…こうして入れる！」

僕「猫耳は帽子で……体育」

僕の頭の中はごちゃごちゃして何が何だか分からなくなってしまった。

僕は賭けに出た

僕「帽子をかぶって教室では言い逃れ、体育の着替える時はトイレ！」

あまりにも単純すぎる答えにたどりついた。

帽子が少し浮くのは少し不快感があるけど無理やり押し込んだ。

僕の学校周辺は交通量が多く、国道もある。だから集団登校。さっそくここではれる危険。

友「帽子なんて珍しいね〜…というより今日、日差し強くないよ？」  
…聞かれた時のセリフ考えてなかった…  
そうして言った言葉が

僕「帰り強くなると困るからさあ〜」  
そういつた瞬間はよかったけど  
友「でも今日午後は雨だよ？」

ああ…早いがもう考えがない…いつそのこと事実を…いや…笑われたり、でも男の猫耳プレイでも何でもないし性的なこと本気で考える時期じゃないし… 混乱。意味不明

友「どうした？」

僕「ま、まあ学校に着いたらゆっくりと…」

友「は？」

登校班に集まる人が全員集まった。

そして片道1・5キロ、大体30分〜早いと15分くらいで学校につく。

僕「…登校班はクリア〜」

あやしまれる学校生活　↓登校班↓（後書き）

ちよっぴりオマケ

兄「そういえば本々の耳どうなった？」

僕「機能してない……」

兄「猫耳が本物で本々の耳が飾り物。と…メモメモ」

僕「そういえば無意識に音楽聴くときイヤホン猫耳につけてた…」

兄「無意識に猫耳を本物の耳と認識している。と…メモメモ」

僕「いちいちメモるな」

兄「尻尾はなでるとどうなるか」

僕「え？」

ナデナデ  
兄

兄（ナデナデ…止」

僕「あゝもつとおゝ」

兄「気持ちいい？」

僕「言いくいが気持ちよくもつとやってほしい」

兄「弟の半猫化は精神的にだけ進んでる」

僕「にやあゝゝゝ」

兄「???」



## 朝休みの学校にて

翼の学校では8時25分まで朝休みがあり8時ごろに普通、登校班はみんなつく。

委員会など朝の準備をするようにあるものだ。

ひとまず教室について朝の準備をしてると友が話しかけてきた。

友「で、さっきの「ま、まあ学校に着いたらゆっくりと…」ってなんだ？」

僕「え、あ、なんでもない…」

友「で、帽子を今でもかぶっているのはな…<僕「ファッションです」

友「いやいや多分ちがうと思…<僕「いいえファッションです。」

友「帽子なんてはやってないよ？」

僕「そう？かな？」

友「まあ学校では帽子を脱ごうね。」バツ

ああ、もう終わった…近くににいる人の目線が僕に集中する。

友「wwwwwwww何それコスプレ？」

僕「」

どんな言葉を発しているかわからなかった。

教室にいるほとんどの人「

W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
L

$$\begin{matrix} \vdots \\ W \\ W \\ W \\ W \\ W \\ W \end{matrix}$$

僕「めんどいことになった…」

僕「そんで…そうなってペラペラ…以下略」

女子「猫耳付いただけでかわいいー」 ナデナデ

全然話を聞いていない。

僕「そんで……以下略」

友「よく見ると尻尾が…」バサッ

出された。

僕「あ、しつ……って出すなよ！」

友2「尻尾柔らかい」モフモフ

僕「さ、触るな……ふにゃあ」

教室にいる以下略「かわいい」

そんなに今の僕ってかわいいの？

予想外の展開、そして羞恥心で頭がいっぱいになって目の前が真っ黒になってしまった。

気がつくと保健室。

僕「ん」…僕はいたい・・・」

保険の先生「こっちが聞きたいわよ」

僕「あ」…説明する必要があるそうだな」

先「へ」そういうことだったの」…でお母さんとかに行った？」

僕「いや」…事情を説明したところで…中略…ということ以下略」

先「そんで3日に一回又は運が悪い時は「にや」がつくということですか…あ、もうこんな時間」

先「そろそろ授業ですよ。クラスに人ほとんどに知られたんでしょ。恥ずかしいなら帽子かぶっててもいいよう担任の先生に言っときます。尻尾は露出するとして…」

あ、あと運んでくれた人に感謝しなさいよ…って、気を失ってたか…」

僕「いや、もういいです。先生に説明しといてくれれば…」

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8941u/>

---

猫耳事件

2011年8月24日21時24分発行